

小學  
新撰修身書

安原時太郎閱  
平井義直編纂

二

X110.1  
182  
2

# 小新撰脩身書

此表ハ初等科第三年前期生徒ノ授ク  
ル爲ニシテ主ニシテ日者父母ノ事ハ兄弟ニ  
交ハル等ノ則ノ教ノ孝弟ノ道ヲ知ラシ  
ム

小新撰脩身書卷二

安原時太郎 関平井義直 編纂

## 第一章

○父母の恩 きはまりな  
たこと 天地にひとり

# 小 新撰脩身書

此卷ハ初等科第二年前期生徒ニ授ク  
ル爲ニシテ主トシテ日常父母ニ事ヘ兄弟ニ  
交ハル等ノ則テ教ヘ孝弟ノ道ヲ知ラシ  
ム

小 新撰脩身書卷二

安原時太郎 撰

平井義直 編纂

## 第一章

○父母の恩 きはまりな  
らこと 天地にひとし

父母なくんバ かんぞ我  
あらん 其恩 海よあも  
ふかく 山よりも 高  
— 海山は 限りあり  
父母の めぐみは 限り  
なし

大和俗訓

○わかき時ハ 我も人を  
父母の恩を 思はず  
力を盡さばして 不孝  
を行ひ 父母終りて 後  
悔されど 益なし 是  
一生の 限りなき 恨みな

り 同上

○父母に對しては 色を  
やじらげ 氣をくだし

溫和を主として つかふ

づし 家道訓

○父母こまを愛されば

よろこんで 忘きすこ

れを惡めば 懼れて 怨

むことあり 過ちあまを

諫めず 逆さず 曾子

○父母長上 教誡するこ

とあらば 首をたきて

これを聽く  
 づーみど  
 里小議論を  
 處からば 朱子  
 ○孝子の老  
 と養ふや



其心を 樂まゝめ 其志  
 にたゞをす 其耳目を  
 樂ゆゝめ 其寢處を安ん  
 づ 其飲食をもめて  
 心を忠養は 曾子  
 ○孔子曰く 今の孝ハ

是能く 養ふことはいふ  
 犬馬小至るまで みか  
 よく 養ふとあり 敬  
 せむ人バ 何をあけ  
 別たんや 論語  
 ○出ると起ハ 必告げ

反きは 必面了を 遊ぶ  
 とこ迄 必常あり 習ふ  
 とある 必業阿里 礼記  
 ○父母の愛をる所ハ 二  
 事を愛し 父母に敬する  
 所ハ 亦古礼を敬し 犬

馬小至るまで 盡く志あり

且 況や人に於くをや

礼記

○人乃子たる者ハ 聲なき

きよ聴き 形亦知小視る

高きよ登らず 深きよ

臨まざり 苟くも 嘗らば

苟くも 笑はず

同上

○孔子曰く 身體髮膚

之を父母に受く 敢て毀

む 傷らざるハ 孝乃始

めあり 身を立く 道を

行ひ 名を後世に揚げ



以く父母を顯すハ 孝の

終ふ孝經

○孔子曰く 其親を愛せ

ざして 他人を愛するも

の 之を悖徳といふ 其

親を敬さばして 他人を

敬するとは 之を悖禮と

いふ 同上

○又曰く 親を愛するも

のハ 敢く人を惡まず

親を敬するもハ 敢く

人を慢るは 同上

○夫孝ハ 親小事ふ多に  
始まり 君に事ふる  
中し 身と立つる小

終る 同上

○父母いませば 遠く遊  
はず 遊ぶこと 必方あ

りどハ 既告げて 東にゆ  
くといつど 更り西を

適のさるか如し 學的

○父母に孝順し 長上を  
尊敬するハ 百行の首  
萬善の原なり 人よく此

道を盡しうきは 天地鬼

神之をすす 親戚隣

里之をたも人す 齊家宝要

○我からたハ 父母の體

を分て 賜ハリしも能か

きハ 髮一すじえ あた

になすまじき理あり 父子訓

○農工商いづきも 其所

作とよく勤め 怠らば

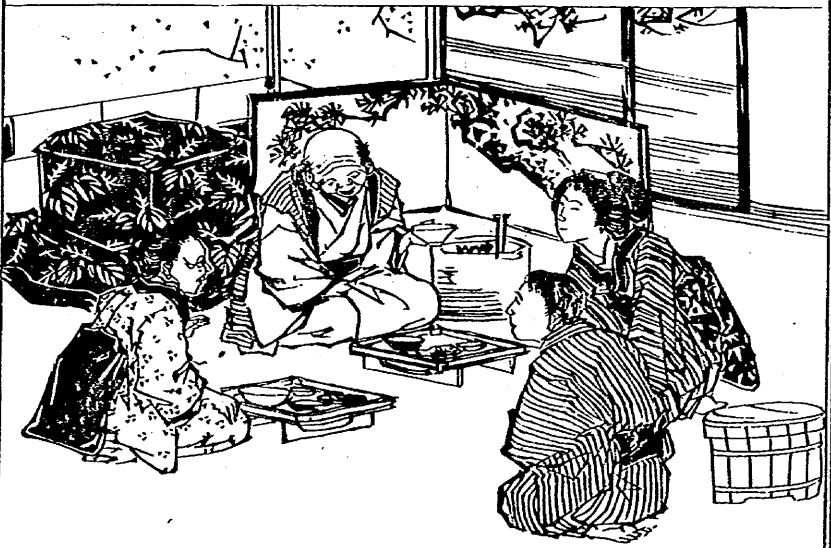
財穀を貯へ むざと費さ

ど 身もち心だて よく

慎み 公儀を畏きと 法

度よそむらさず 我身妻子  
 のことをば 第二と  
 父母の衣服食物を 第一  
 小思ひ 心力を盡して  
 及ばぬまことをも 調へて  
 よるこはるく やうに

もてあし  
 よく養ふる  
 庶人の孝  
 行なり 翁問答  
 ○天地父母  
 ハ我生れ



一 本ふして 我身の よ  
 つて来まきる初かり 忘る  
 べあらば 天地の恩を  
 知らずして 仁ふそむき  
 父母の恩を 思もばし  
 孝を行はざるハ 我

身の生れ来まきる 本初を  
 忘まじむなり 人と生れ  
 たる かむかゝといふべ  
 一 我人の耻と 畏る處  
 きこと 是れより 大か  
 るハかゝ同上

○一言の偽りも 不孝か  
 まして不義無道を  
 身に行ひ 死すべき處小  
 て死をむ 死ぬまじき  
 ところりて 犬志にをか  
 一とるまじき物を む

まぼり せむべき物を  
 とらずして 飢寒小及む  
 ふとするハ 皆以てのほ  
 ろ 大なる不孝かり 心  
 にかけて 慎み守るべき  
 ことなり 同上

# 第二章

○兄弟ハ 同胞の親み  
 父母に次ぎたる 天倫か  
 三親の内 父子夫婦  
 よりも 交ハリ久しきハ  
 兄弟あり 其久しきを

樂むべし 兄ハ弟に  
 愛ふらく 弟ハ兄小 敬  
 を盡とべし 初學訓  
 ○兄弟ハ 同根より出た  
 る 數幹の如く 數幹よ  
 り出たる 數枝のごとく

又氣の連ること 宛と

十指の如くなまきバ 相和

― 相愛せむんば 有る

べからば 同上

○ 夫夫婦ありて後 夫婦

あり 父子阿あてのち

兄弟あり 一家乃親 此

三川のここれよあ以往

九族に至るまゝ 皆三

親に本はく 故小人倫に

わいと 重いとす 顔氏家訓

○ 兄弟ハ 形をわかち



氣をつらぬる 人あり

其幼おるに當りては 父

母左右にむさげ 食まゐる

と起ハ 案を同ふー 衣

ると羨ハ 脈を傳へ 學

ぶや起は 業を連絡 遊

ぶときも 方を共ふす

悖亂の人 ありといこと

も 相愛せざることを能ハ

す 同上

○弟ハ悌をもつと 兄小

法かふる 誠道とほ 悌ハ

敬ひ順ふ徳あり 他人の  
 年老ひ 位高きに 法か  
 ふるも 同ドことハ里な  
 り 他人ふても 老いた  
 るを敬ふる 道理能當然  
 かり 由して 親乃身を

わきて 我に先だちて  
 生れさる兄を 敬ひ順ふ  
 べきこと 勿論なり 翁問答  
 ○兄弟門墻の内に 念り  
 せめぐといへとも 外能  
 侮りある小至りてハ

力を同ふ一丁 心體をふ  
せぐ 大學衍義

學小 新撰修身書卷二終

明治十五年五月三十日版權免許  
同 十六年十月十二日再板御届  
同 年十二月廿五日刻成發兌

定價金六錢

編纂者

京都府平民

平井義直

上京區第廿六組蛸茶師町十一番戶

出版人

京都府平民

杉本甚介

下京區第五組辨慶名町十六番戶

專賣

大坂

柳魚喜兵衛

鳥取

横山安次郎

島根

園山喜三右門

島根

川岡清助

書肆

